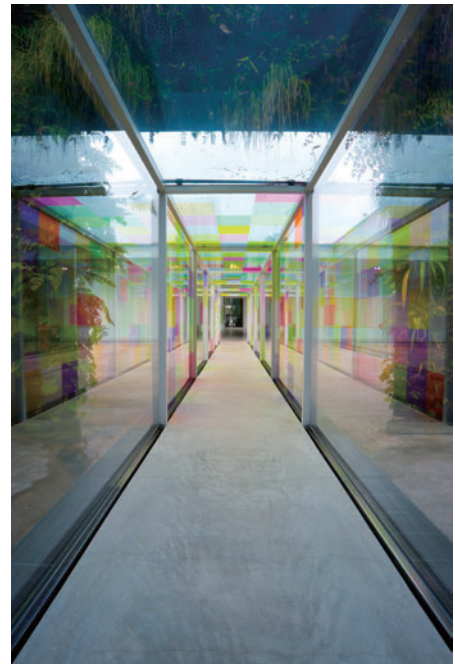




1



2

## モニック・フリードマン展

2011.11.23–2012.3.20

1970年代終わりから作家活動が続けるフリードマンは、フランスを代表する女性作家のひとりとして注目を集めてきた。2009年にレジオン・ドヌール勲章を受章し、名実共にフランス現代絵画の中核を担う作家といえるが、日本を含むアジアではこれまで本格的に紹介されたことはなかった。彼女の作品は、置かれる環境や鑑賞者など多様に変化する要素へ開かれ、繋がることで意味が深まるという点で、近代の抽象絵画の系譜を受け継ぎつつも、その枠を軽やかに解き放つものとして評価できる。近年では、紙や布など多岐にわたる素材を用いたインスタレーション作品も手がける彼女の作品世界を、当館の特徴的な建築の中で空間と時間の両軸を含めたスケールで展開すべく、作家との密なコミュニケーションを通じて展覧会の実現に至った。

本展において作家と共有した重要な考えは、環境の諸要素や鑑賞者の知覚体験が加わってこそ作品および展覧会の意義がより深まるということである。そのため、必ずしも順路を固定せず、来場者が自由に回遊しながら展示室や通路スペースに展示された作品を鑑賞できるようにした。また、あえて自然光が天井ガラスから差し込む設定にしたり、ガラスに囲まれた通路を作品の舞台とするなど、作品と鑑賞者との間で一期一会の生きた対話が生まれることを願った。

展示室11では、作家が制作の核とする絵画の代表作を一堂に展示した。カンヴァスの下にランダムに置いたロープや小枝の痕跡をパステルの塊と顔料で写し取る技法により、内部から発光するかような色を放つ大作シリーズ「ナージュの婦人たち」や「輝き」が並んだ。

フリードマンの絵画と色彩の世界は、ターラタンという糊付けした目の粗い薄地の布を用いたインスタレーション《赤の部屋》で、さらに新しい展開を見せた。顔料で微妙に異なる色調の赤に着色されたターラタンが数層に重なりながら展示室12の壁面全体を覆い、観る者を濃密な色彩の渦に包み込んだ。昼間の柔らかい光のもとでは、優しく親密で、胎内にいるかのようにどこか懐かしさをも感じさせる「赤」が、日が暮れ、展示室の照明が支配的になる頃には、より強く超越的な「赤」の空間へと変貌する。刻々と変わりゆく作品の印象を多くの鑑賞者が体感した。

光庭(中庭)を横切るガラス張りの通路も、フリードマンは作品へと転換した。通路のガラス壁3面に約20色の正方形パターンからなるフィルムシートを貼ることで、そこを通る来場者の



3



4



5

体に色と光のシャワーが柔らかく降り注ぐという作品である。このサイトスペシフィックな新作を作家は《カレイドスコープ》（「万華鏡」の意）と名付けた。色を帯びた光は光庭や屋内の床や壁へ映り込み、来場者に新たな空間体験を促した。

さらに、円形の展示室14では、壁面全面に約800枚の薄い日本紙を張り巡らした新作インスタレーション《ざわめき》を発表。来場者の動きや空気の流れによって半紙のように薄い紙はふわりと浮き上がり、無限の動きを見せる。紙の奥の壁面には薄い紫色が塗られ、紙がめくれ上がった瞬間に、もしくは薄い紙を透して、かすかな色が見る者の知覚を刺激する。見え隠れする色、紙の予想外の動き、紙の音や来場者の声や足音は渾然と混ざり合い、ざわめく「気配」を生んだ。

作家の過去の代表作から新作インスタレーションまで本展に出品された計13点の作品は、明るく白に満ちた空間に独自の色と光を放ち、観る者の心身に深い余韻を残した。これまで作家が追求してきた表現の新しい可能性を体感させる機会となったことに加え、上述の新作《カレイドスコープ》が2012年、第17回CSデザイン賞「中川ケミカル賞」を受賞したことも本展の大きな成果である

(吉岡恵美子)

1. ガラス通路：  
《カレイドスコープ》2010-2011年  
カラーフィルムシート
2. ガラス通路：  
《カレイドスコープ》2010-2011年  
カラーフィルムシート
3. 展示室11：モニーク・フリードマンによる絵画群展示風景
4. 展示室12：  
《赤の部屋》2010-2011年  
顔料、バインダーで着色したターラタン
5. 展示室14：《ざわめき》2010-2011年  
着色した壁に紙（BIB TENGUJO）

1-5. Photo: TOYONAGA Seiji